

論文審査の結果の要旨

論文提出者 板垣 竜太

本論文は植民地期の朝鮮における社会変化の実態を、慶尚北道尚州という地域社会を事例として、近世から植民地体制にいたる長い歴史的な軸のもとに、多角的かつ重層的に記述・分析したものである。

本論文は序論と五つの章と結論とからなっている。

序論では本論文の問題設定がなされている。人々による具体的な植民地経験を記述するための準備として、それ以前の社会過程を近世という概念で捉え、植民地以後の近代については「植民地近代論」を採用する展望が示される。そして「植民地近代」の経験を、近世における地域社会の状況を踏まえて、植民地化に伴う新たな制度的状況、地域エリートの政治空間の変容、新式教育の展開について検証した後、具体的な個人の側から植民地近代の実際の経験によって吟味するという本論文の方針と構成が示されている。

第1章では、尚州における近世が形成される過程について、地理的条件、郡行政の邑の成立、後の植民地体制において重要な地域エリートを提供した漢文知識層の士族と彼らの婚姻および書院を拠点にしたネットワークの形成、郷吏層の形成と活動が具体的に紹介されている。

第2章では、植民地化の具体的な記述として、軍事警察面の支配装置の確立と、地方行政の拡充と農村振興運動における農村への組織的な介入過程、邑内の市街地化、商業的農業への産業政策の介入の事例として養蚕業と酒造業の例が検証されている。

第3章では、地域エリートのネットワークが担った三一独立運動とその後の社会運動の諸団体の動向を通して、「有志」や「青年」の政治活動の先鋭化した動きが官憲の弾圧を受け一方で、30年代以降は地域内で体制内化してゆく過程と、その近代経験の有り方を出版物の分析によって明らかにしている。

第4章では、近世以来の地域エリートの知識基盤である漢文教育が、植民地政策による新式教育とどのように共存しながらやがて吸収されていったのか、また彼ら「有志」が学校設立にどのように関わったのかという点から、「植民地近代」を教育面においてどのように経験したかを、具体的な学校の事例について検証している。

以上の章が、地域社会における植民地化過程の状況について、主として制度と組織および事業と運動に注目して、地域エリート層の関与と経験を農業・経済や政治・思想や教育・啓蒙といった分野について検証したのに対して、第5章では、個人の具体的な生活に即した植民地経験を取り上げることによって検討するものであり、筆者は日記の分析によって、植民地の農村青年の置かれた複雑な状況を生き生きと分析している。そして、最後に全体の論点を的確に総括して結論としている。

本論文は、時期としては植民地期という今世紀前半を対象としており、しかも多くの文献資料を用いているが、その分析にあたっては、地域社会の持続と変遷についての考察、士族・吏族というエリート社会における社会関係と組織と活動についての認識、運動や組織における多様性と重層性および指導や運営に関する洞察、個人の状況認識や行動の両義性などの洞察などの点で、複雑社会を扱う人類学的な考察が存分に発揮されており、厚みのある民族誌による記述・分析として高く評価される。

さらに、植民地期の朝鮮社会の研究として本論文が評価される点をより具体的に示すなら、次のとおりである。

(1) 植民地期朝鮮の社会変化の研究として、特定の地域社会について近世状況からの持続的な展開の中に植民地過程を位置づけ、植民地行政の介入と地域住民との相互性の中で捉えている。

(2) 社会変動を経験する主体として地域エリートに注目することによって、士族社会の人類学・歴史学的な研究を踏まえ、かれらの行動を通して植民地経験の具体的な記述に成功している。

(3) 地域社会の単位として具体的な邑を設定することによって、「植民地近代論」について行政、農業経済・政治・思想運動、教育・啓蒙活動の諸分野にわたって相互関連のもとに集約的な記述によって明らかにした。

(4) 植民地という体制、地域エリートという範疇、組織や制度や運動という集合的な状況を扱う一方で、特定個人の行動と認識についてきわめて微視的な接近法を併用しており、レベルの異なる現実をつき合わせて相互検証することによって、社会記述に厚みと説得力をもたらしている。

(5) 植民地状況における個人の近代経験に迫る方法として、S氏という個人の日記資料を活用して、日常生活に注目した記述と分析はたいへん斬新なものである。日記の中でS氏

は植民地そのものについて直接は言及していないが、筆者は、日記の中にしばしば登場する新聞、雑誌、蓄音機、郵便、鉄道と駅、時間と暦、病院と薬、衛生と理髪といった具体的な物や消費に注目して、それら「新しいもの」が「近代のメディア」として、青年S氏の生活空間にどのように作用したのかを慎重に分析することによって、植民地経験を個人の認識と行動を踏まえて記述している。とりわけ、「新しいもの」と「古いもの」、都市と農村の対比をめぐるS氏のアンビバレントな表現に注目した分析は、植民地状況における仕事の評価では満たされない知識青年の「憂鬱」な生活現実を明らかにしている点で、たいへん優れた成果と評価できる。

このように本論文は、問題の設定からはじめて、近世についての歴史的な状況を踏まえた上で、植民地化過程における近代経験としての具体的な社会変化の記述、そうした「植民地近代」を経験する個人の内面の葛藤に至るまで、一貫して「植民地近代」の実態に迫

っており、民族誌的な記述・分析に成功している。また、複雑かつ難題といえる植民地期における社会変化の実態研究において、日記を含めて多彩な文献資料を活用することによって、植民地経験のアンビバレントな様相を浮き彫りにする上で、意欲的で独創性あふれる手法を提起した点でも貴重な成果である。

審査委員の中からは、朝鮮社会の歴史的な専門用語について注の中で多少の説明が欲しい箇所があるという意見が出されたほかは、ほとんど欠点らしい欠点も指摘されず、全体としてたいへん完成度の高いという評価で審査委員の意見は一致した。

したがって、審査委員会は本論文が博士（学術）の学位に相応しいものと認定した。